

あかとう堂々

発行／飯綱町役場 企画課 地域振興係

Tel : 026 - 253 - 2511 FAX : 026 - 253 - 5055 E-mail : shinko@town.iizuna.nagano.jp

赤東未来創造プロジェクト 集落支援事務局<<赤東コミュニティ消防センター2F>>

携帯 : 080 - 7733 - 5627 E-mail : shurakushien@gmail.com

続・赤塩窯よ 甦れ！ いいづな講座 ～『赤塩焼の歴史』～

一月二十三日、第一回いいづな講座（いいづな歴史ふれあい館主催）が、町民会館「元気の館」で行われました。いいづな講座は、歴史を通して飯綱町を再発見するというもので、この日は「赤塩焼の歴史」と題して、これまで知られていなかった小林栄十郎のルーツや、当時の作業の様子などを詳しく聞くことができました。講師はいいづな歴史ふれあい館の小柳義男館長です。

赤塩焼は、江戸時代末期から大正期にかけて赤塩毛野で焼かれていた陶器で、当時は「毛野焼」と呼ばれていました。後に陶芸家唐木田又三（又土）氏により「赤塩焼」と命名され再認識されるようになったこのことです。

小林栄十郎は赤津村出身（現愛知県瀬戸市）ということ、両親とも窯業に携わる家に育ったようです。

栄十郎は赤塩に来る前は篠ノ井に移住していて、縁があって赤塩毛野の小林家に婿入りします。この時九歳の息子作治郎がいました。

栄十郎の赤塩での製陶期間はわずか三年。作治郎が一三歳の時に亡くなるまで、はつきりとした資料はありませんが、「日記覚帳」が残っていて、それによると少なくとも八年の歳月を要しています。父栄十郎の残した技法書を参考に苦心したようで、それはそれが大変な作業の繰り返しだったろうと想像を馳せます。

赤塩焼の特徴は、松代焼の系統で地元の土と篠ノ井の土を合わせて製造されています。容量の異なる十数種類の瓶をはじめ、すり鉢、徳利、火入、紅鉢、片口などといった日用陶器が多く、販売先は主に中野・飯山方面を中心に出荷されていたようです。

明治十七年の出来高の記録を見ると、収入は三十五円六十銭九厘。因みに当時赤塩にあった改新学校の職員の月俸が十円でした。

出土遺物の中には、焼台やトチンといった道具（焼く際、器同士がくっついたり寄りたりしまわれないように使用）もあり、陶製の工程がリアルに感じました。小柳館長は、こうした遺物や現存する製品をより多く見て、赤塩焼の特徴を鮮明にしたいと語ります。

この日、信濃町の棚橋孝之さんという方が、左写真の小皿を持参されました。その小皿が納められていた木箱には、まぎれもなく赤塩焼を証明する内容が書かれています。会場に一同に感嘆の声が上がりました。

尚、赤塩焼の歴史についての詳細は、「飯綱町の歴史と文化」（いいづな歴史ふれあい館編）第三号に掲載されています。



あかとうこんじゃくものがたり
赤東今昔物語 ⑦

そうか
読んだか
はい
「重右衛門の最後」
どんな内容なの？
その
つて

主人公は
とある東京の学校で
信州からやってきたという
三人と親しくなるの
その友人たちから
故郷の美しさを聞いて
とても興味を抱くの

それで数年後 三人に会いに
信州の山中にある
塩山村を訪れるん
だけど・・・
その塩山村が
赤塩毛野という
ことなんだ
へえ
村では毎日のように
放火騒動があつて

む、村人たちに
殺されてしまうつて
まさかそれは
マジじゃないでしょ？
小説での話でしょ？
小説ではあるが
実話に基づく
作品なんだよ
えっ！

放火の犯人とされていたのは
村での厄介者 藤田重右衛門
この人物
あまりにも非道で
傍若無人なふるまいに
最終的には 村人たちに
殺されてしまうの

節分月の「あかとうの日」は、二月十日水曜日です。あつたかい鍋を囲んで赤東の未来を語り合います！時間は六時三十分から。友人知人を誘ってお越しください。お待ちしております。

《あかとうの日》で福は内！



センターにピアノがやってきた
保育園の統合でピアノが2台になってしまふことから、赤塩保育園のピアノを赤東コミュニティ防災センターに移動いたしました。
これまで何名の園児がこのピアノの回りで歌い、お遊戯をしてきたことでしょうか。様々な思い出が染み込んだこのピアノ、第一のステージは区民の皆さんが集う場所に移り、さらにまた沢山の愛される曲を奏でてくれると思います。
基本的にはどなたでも使用できますが、一言区長まで連絡を入れていただきますよう、お願いいたします。